

## 「地図の話」復刻版に挑戦

少し手持ちの書籍類を整理して、数を減らそうと思いつき本棚の整理に着手した。

思い出や思い入れのある一冊は処分しがたく、やっぱり残しておこうということになったり、もう一度読んでみることにしたりで、進行ははかばかしくない。

6月のある日、一冊の本を手にしたところで動きが止まってしまった。

「地図の話」武藤勝彦著、昭和17年岩波書店発行（当時の価格は一圓二十銭）。

我が家に古くからあったものではあるが、出会いの記憶があまりない。中学生ぐらいの頃に読んでみたら、面白いことが書いてある本だなと思ったが、やがて記憶の片隅に消え去ってしまった。

高校生になって、旅や登山に踏み込むことになり、偶然にもこの本に書かれている内容と重なることになった。

二十歳代の頃になって、本棚から見つけ出して再び目を通してみた。地図・測量・地形図などのことについて小中学生向けに書かれたものであるが、豊富な内容に驚き、アンダーラインを引きながら読んだ。その結果、数多くの転居を経験したが、捨てられることなくここまで辿り着くことになった。

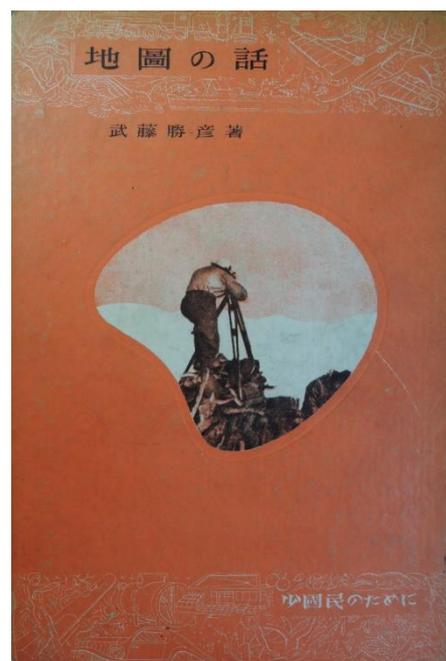
表装もしっかりして外見的には長い歴史年表を歩いて来た感があるが、頁をめくってみると、紙の変色や劣化が目立ち、製本に使用されている糸も切れがちで、もはや風前の灯火。もう一度読み直してみたいと思ったが断念せざるを得なかった。

それから数日後、廃棄予定の書籍の小山に積まれた中から再び引き抜いてきた。復刻版を作れないだろうか。

一頁に11行、一行に37文字、本文は290頁ほど。400字詰め原稿用紙で300頁の文章を書くと思えば……

毎日少しずつやれば……出来るかも知れない。

そうだ、自分だけの保存用として「復刻版」を作ろう。



用紙は A4 横置きで、原本通り縦書きにして、要所に入っている挿し絵は予めデジタルカメラやスキャナーで画像ファイル化しておき、ワード文書の中に適宜挿入することにした。

完成後は各頁を二つ折りに山折りして綴じれば A5 版の本になる。表紙と奥付も画像化して保存して、まずは試作として5頁ほど打ち込んでみたら、仕上がりのイメージが湧いてきたが、A4 を二つ折りにするために厚みが増してしまう。原本では、第一部・第二部の二つのパートに分れているので、二冊に分冊することにした。

毎日数頁から5,6頁の入力ペースで作業が動き出した。出来上がったら読み直すのを楽しみにして……

と思っていたのだが、入力しながら読書が出来ており、10頁毎に繰り返す校正作業でまた読書、出来上がるまでには何度も何度も読書が済んでいるだろうことに気がついて、思わず一人で苦笑。

武藤勝彦著「地図の本」の表紙には、岩波書店が付けた副題として「少国民のために」と書いてあり、戦時下を感じさせるものではあるが、明日を担う子らへの一冊」と願った岩波書店の姿勢が感じられた。岩波書店ではこの後「岩波少年文庫」というシリーズも出しており、子どもの頃に随分世話になった。

武藤勝彦氏のことをインターネットで調べてみた。東京帝国大学理学部物理学科卒業で、旧制山形高等学校教授を経て大正12年に陸軍陸地測量部に入った。のちに国土地理院院長となり、日本天文学会評議員・特別会員などを歴任。昭和36年に国土地理院院長を退官。我が国の測地天文学の分野での権威者だった。昭和41年に71才で他界。

巻頭の「はしがき」の書き出しで、「支那事変、第二次世界大戦が始まって以来、大東亜戦争に至るまで、地図が人々にとって重要な存在になってきた」ことについて触れているのが、いかにも昭和17年発行の本らしい。

本文は、スティーブンソンの「宝島」で始まる。

ある日ジム少年の家に、怪しげな水夫らしい男が現れる。その後様々な人が現れ、様々な事件が発生する。そして男は一枚の地図を残して死んでしまう。地図には「宝もの」のありかが示されており、この地図を中心に始まる宝探しの旅が「宝島」という本である。

地図が持つ意味を感じさせた後で「地球とは?」「長さの単位」などに触れ、「地図の歴史」に入って行き、測量や天文学について踏み込んでいく。大人が読んでも十分に引き込まれるような内容の一冊である。

今や情報過多、情報入手手段の多様化などにより、人々は「他人が作った情報を活用する力」は身に付いたが、「考える力」や「作る力」が劣化してしまったような気がする。

知人との会話の中で、さる場所を教えていただくことになり、白紙を出してここに地図を書いて欲しいと申出ると、分かりやすい地図を書くことが出来ない人が多くなってきた。

地図を書く時に、「現在地」または「自分が居る場所」を起点として書く事や、地図を見るときに地図の中に自分がどんな向きに立っているのかがすんなり理解できない人も少なくない。地図がナビゲーションスタイルで画像表示されるので、方向感覚がわからなくても済んでしまうし、目的地への指示型の表示が主体となっていることに慣れてしまった人々は、「地図で全体を知る」ことや、その中で方角を確認して「自分の位置を認識する」力が弱まってしまったのかも知れない。

太陽の位置から時刻や方角を知ることや、北極星を探して北の方角を知ることなど、基本的なことを忘れてしまった人も今や少なくない。「地図を書く力」と「地図を読む力」の大事さを感じる場面が多くなってきた。

そんなことも手伝って、久しぶりに熟読する事になったこの本は、新鮮な刺激を与えてくれた。

というような次第で、本棚の本の大整理の副産物として、自作の本「地図の話(復刻版)」が二冊増えるという結末になってしまった。

以上

#### \*追記の情報

「地図の話」復刻版(第一部・第二部)制作は、8月末完成を目指して順調に進行中(8月20日現在)